

団塊のカタログ

ワシラ

トシタロー・クラフィティ

昭和32年といえば、ワシの4年生の時だ。

初恋・らしきモノ

高学年 になって、責任感らしきものが芽生えてくる頃である。

新しい担任は長谷礼子先生だ。「行動の特徴」の評価はそれまでの3年間とほとんど変わらない。1学期「明るく動作は活発です。時々いたずらがはげしくて、友達の批判の対象になるときがあります」「学科にすぐれている割合に、行動面がおちます。もっと責任感をもたせるようにしたいと思っています」

2学期「明るくユーモアがあり、よく友達を笑わせます」「落ちつきがなく学習中、時々注意を受けます。協調性や責任感に欠けている面も、多少見えます」（原文のまま）

時々とか多少に長谷先生の思いやりが見受けられるが、3学期になると「相変わらず明朗です。大へん腹はいいのですが、その場限りでやってしまつて、後は考えようとしのないのきな所があります。やはり努力が一番大切であることを、自覚させてください」

これまた今でも指摘されることばかりで、**男いらず**のように人によつては怒りを買うだけのユーモアもこの頃からである。

成績 はドーンと良くなった。今まで算数にしかなかった**5**（大へん進んでいる）が社会と国語と理科にもチラホウ見受けられるようになった。エヘン。

この学年を境に、これら4教科に**3**以下の評価をされることはなかったし、**4**より**5**の

方が多かったところを見ると、ワシの才能を最初に見抜いたのは長谷礼子先生なのかもしれない。そして、成績など屁でもない我が人生最大の出来事があった。**初恋**である。

男と女の違いをなんとなく理解し始めた頃に芽生える感情が初恋だ、と思う。

男のコも女のコも持ちモノの違いには早くから目覚めるが、オシッコ以外の機能にはなかなか気付かない。「大事にしろよ。シヨンベン以外にも使えるぞ」と言われても、雪に名前を書くことくらいしか思いつかない。

時々固くなるのも困るのだ。反ってるヤツを手で押さえないきやいけないし、勢い良くとびだしたりしてマトが定まらない。

それでも自分でその存在を確認できる男のコにくらべ、女のコははるかに不利だ。

赤ちゃん が生まれる時「元気な男の子ですヨ。ちゃんと付いてますヨ」と新米パパにニッコリ微笑みかける看護婦さんはいるが「かわいいお嬢さんですヨ。ちゃんと割れてますヨ」とは言わない。

こんなつまらないことで幼い心を痛めた女のコもきっと多かったろうが、いずれにしても男とちがって実体がないから、一時期コンプレックスに落ち入るはずだ。

そんな小さい頃からの素朴な疑問が具体的になるかならないかの時期に芽生えるのが初恋ではないだろうか。もうちょつと大きくなって、ちがう使い道を試してみたくなつてしまうと、もはや初恋ではない。

それはさておき
閑話休題、一日の授業が終つて大急ぎで家へ帰つて、ランドセルをぶん投げてからいつ

たん学校へ戻る。そこへお目当てのコが、こ
学友と一緒に笑いながら出て来る。

両頬のエクボがカワイイコだった。

知らんぷりしてすれちがってから、ソツと
後を付ける。家の中に入ってしまったらそれま
でなのだが、未練がましくその一角を行ったり
来たりウロウロして、やっとあきらめる決
心がついてそれでも何回も振り返りながら、
シブシブ我が家へと足を向ける。4年生にな
って間もない、6月の小雨ふる昼下りのこと
であった。これを大人になってからやるとス
トーカーで、程度次第で犯罪になる。

かなり暗いが、このクラさが初恋なのだと
自分に都合のよい解釈をしてから、さらに清
らかであっても明るくてはダメで、明るくて
も失恋に終わらなくてはいいけない。

だったらハナっから暗くても良いのだ。

かなり強引な論理展開だが、小学生の頃の
初恋なんてこんなもんだ。

美しくもやるせない思い出をありがとう、
旧姓・伊藤、現姓・飯川弓子さん。

原子の灯ともる

推進

・容認・凍結・全廃が入り乱れてや
やこしいのが**原子力**発電である。

茨城県の県庁所在地水戸市と日立市の中間
にある東海村に**原子炉**が建設され、この年の
8月に初めて**原子の灯**が灯った。

専門的には「臨界に達した」というらしい
のだが、まだまだ実験の段階にすぎず、本格
的に発電の手段として実用化されるのは6年
後の**昭和38年**になってからである。

発電そのものの仕組みは意外と簡単だ。

一言でいえば、モーターを逆に回せば電気
がとれるのだ。こいつが発電機（タービン）
で、回す動力源によって**水力・火力・原子力**
に分けられる。（風力・地熱なども同様）

ダム

で水をせき止めれば人造湖が出来る
から、その貯めた水を必要に応じて
流し、ドサクサにまぎれて発電機を回すのが
水力発電だ。ダム自体に河川の氾濫をおさえ
る治水作用もあるし、下流にある都市部の水
源確保もできるとあって一時は大いに歓迎さ
れたが、費用も時間もかかり、自然環境を破
壊するということで新規建設は次々と見送ら
れ、やがて**火力**発電が台頭してくる。

水の落差を利用する**水力**と違い、石炭・石
油・天然ガスなどを燃やしてお湯を沸かし、
その時に吹き出る蒸気で発電機を回す。

ダムに比べれば建設期間も短いし、建設費
も安上がりということで、電力需要が急増し
た**昭和30年代**にドッと建設され、**37年**にはつ
いに**水力**発電を追い抜くに至った。

その翌年の**38年**にやっと**原子力**による発電
が開始されるのだが、その先駆けがこの年の
原子の灯の点火なのである。

仕組み

は**火力**発電とあまり変わらず、核工
ネルギーで熱を起こして蒸気を発生
させ、こいつで発電機を回す。

安全が100%確保されれば、この3つの発電
システムの中では**原子力**が最も優れている。

水力はいつたん建設されれば後は無公害だ
が、それまでに自然環境を破壊してしまうし
建設コストはケタ違いに高い。

火力は建設するまではいいが、もろにケム
リを吐き出すから大気を思いつきり汚染する
と同時にCO² 公害を引きおこし、地球温暖
化の最大の原因になっている。

日本の主な石油の輸入先である中東はしょ
っ中ドンパチしていて価格も供給も不安定だ
が、**原子力**にはそんな心配はないし、備蓄も
はるかに容易だ。そうはいつでもチェルノブ
ィリやスリーマイル島の例でもわかる通り、
いつたん事故が起きた時の悲惨さはハンパじ
ゃないから**原発反対**はわかるが、これほど矛

盾した反対運動はなく、一時期はやった反原発ロック・コンサート、その電源はすぐ近くの原子力発電所から来ていたなんてのはその典型だ。「許すな原発！市民大集会」が大々的に開催されるとなれば、その会場にたどりつくまでの鉄道や会場の照明とか拡声装置などの電気はみな原発から来ている。

家に帰ってエアコンをつけ、冷蔵庫からビールを取り出してテレビに見入る。

これらすべて、電気が動力の源である。

反対するべき対象を利用して反対する、これほどの身勝手はない。

金電力

供給量の3分の1以上を占めている**原子力**発電をイッキにやめてしまうことが不可能であることはわかっている筈で、良く解釈すれば総論賛成・各論反対だろうが、対案がなければ単なる無責任だ。

風力・地熱・潮流・太陽熱・核融合にしても、発電量・コスト・安定性などが今イチで「さあどうする」がこれからの課題だ。

それまでは消費電力の少ない電気製品を開発するか、逆に発電効率を上げるかするしかない。どちらも道遠し、となれば電力消費のピークを押さえるしかない。そこで、とりあえず夏の高校野球を中止してみよう。

真夏の真っ昼間、エアコンをブン回してテレビ中継を寝転んで見る、毎年この時期が使用電力のピークになる。これに合わせて電力会社は計画を立てているからだ。原発より高校野球ハンタイ、これが現実的な対応だ。

スペース・ウォーズ

ワシの小学生時代の最も衝撃的なニュースといえば、この年（昭和32年）10月のソ連の**スプートニク1号**の打ち上げ成功である。

ソ連（今のロシア）という国はいつもそうだが、都合の悪いことはひたすらかくし、良

いことでも成功してから、いずれにしても突然に国内外に報道する。今回もご他聞にもれず、いきなりの打ち上げ成功の報道で、世界中のアマチュア用観測望遠鏡はアッという間に売り切れ、時ならぬ宇宙観測ブームが各国で巻き起こった。日本も例外ではなく、そうなれば、ワシら小学生も黙っていない。

夕飯をかつこみ、あたりが暗くなるのを今か今かと待ちわびて、オモチャの双眼鏡や望遠鏡を手に手に持って外に出ては夜空を見上げて人工衛星を探したりしたもののである。

懐中電灯

を夜空に向けたりもしたが、ムダな努力に終わったことはいうまでもない。その3か月後の**33年2月**、負けてなるかと今度はアメリカが人工衛星の打ち上げに成功、米ソの宇宙開発（ついでに軍備拡張）競争が本格的にスタートした。

さらに8月末にはソ連がライカ犬2匹を乗せた円錐形の**スプートニク3号**の打ち上げと回収に成功、一年後の**昭和34年8月**にはアメリカの**エクスプローラー6号**が地球の写真を撮影するといった具合で、まさに抜きつ抜かれつのすさまじい競争が毎年のように繰り広げられたものである。そして**昭和36年4月**、ソビエト社会主義連邦共和国（これがフルネーム。略してソ連）は有人宇宙船**ボストーク**（ロシア語で東方）**1号**の打ち上げと回収に成功、それまで仮説と想像と理論だけでしかなかった「丸い地球」の実存が立証されるまでに至った。ライカ犬を露払いに、今度は人間も宇宙に飛ぶ。その名誉ある宇宙飛行士第1号、それが**ユーリ・ガガーリン**少佐だ。

地球を1周した後に無事生還し、その第一声が有名な「地球は青かった」である。

翌37年2月、今度はアメリカが人間衛星船**フレンドシップ7号**を打ち上げ、地球を3周した後にこれも無事帰還した。

この時の飛行士が**グレン中佐**（後に上院議

員。数年前にスペースシャトルに乗り込み最高齢記録を樹立)で、ガガーリン少佐より一階級えらいところに、アメリカの意地が感じられるが、そこは二番手の悲しさで、地球帰還の際の名文句は残っていない。

この時期の宇宙競争はソ連が圧倒的にアメリカをリードしていて、5号に続いて打ち上げられた**ボストーク6号**には女性が搭乗し、地球を48周した。その人類初の女性宇宙飛行士が**テレシコフ中尉**で、こちらは「私はカモメ」なる名文句を残している。

話はちよつとばかり前後するが、こんな具合にいつもソ連に先を越されてばかりでアタマにきた、時のアメリカ大統領ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ(JFK)は「60年代が終わるまでに人類を月に到着させるぜ!」とケツをまくった。このあたりからアメリカの威信をかけたリベンジが始まる。

アポロ

計画と名付けられ、**アポロ11号**が1969年に月に着陸、**アームストロング**船長と**オールドリン**飛行士が月の土を踏んだ。人類が地球以外の天体に足を踏み入れたのはこれが最初で、その一部始終はテレビで全世界にカラー生中継された。

それはいいのだが、着陸船が月面に到着してから第一歩を踏み出すまでがやたら長く、結構イライラさせられたものだ。

アナウンサー「ゲートが開きました!」

解説者「もうすぐですねえ。ところで月面はブツブツ…」こんなしょうもない会話がダラダラと続くが、画面はほとんど動かない。

やつと白い宇宙服の一部が現れる。ダブダブの白のツナギにフルフェイスヘルメット、鉄腕アトムに出てきたのと同じである。

一步一步慎重に、**アームストロング**船長はハシゴを降りてゆく。アナウンサーの声も一際大きくなる。「ついに人類は月に足を踏みいれました!」解説者「感動ですねえ!」

むろん専門家としての面目もあるから、何かともっともらしい解説するのだが、およそ耳に入ってこない。他にもアメリカ人のアナウンサーの英語と同時通訳の日本語が入り交じったりして、実に聞き取りにくい。

ちなみに同時通訳がテレビに登場したのはこのアポロ中継からである。そしてアームストロング船長が月面への第一歩を力強く踏み出し、月からの第一声が送られて来た。

「この一歩は小さいが、人類にとっては偉大な躍進だ」と言っただのであるが、いかにも取って付けたようでワザとらしさばかりが目立ち、あまり感動しなかった。

考えぬいた末のセリフには口クなものがないという見本で、こればかりはソ連の「地球は青かった」「私はカモメ」の名文句には、残念ながら遠く及ばない。

30の中継

が日本時間ではちょうどお昼時だったこともあって、中継が終るが早いか、どこの食堂もそれまでのガラガラからいきなり超満員になったという。

アポロ計画は昭和**47年**の17号でいったん終了した後**スペースシャトル**計画に移行する。

これも開発に成功し、現在に至っているがもう話題にもならない。

今でこそ当たり前のように海外からニュースがナマで飛び込んでくるが、これらはすべて通信衛星を通じて受信される。

オリンピックも湾岸戦争も元をたどればこの年のスプートニク1号から始まったのだ。

小学生だった頃にやつとセコイ人工衛星が打ち上げられたのがワシらの世代だが、今の二十代は人類が月に到着してから生まれていて、この世代の差は大きい。それも時の過ぎ行くままにであるから納得がいくが、あの鉄腕アトムの世界がほとんど現実になってしまったのはちよつと悲しい。何しろ、アトムが生まれた**2003年**さえすぐそこなのだから。